The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	古代中国兵学思想史の研究
Author(s)	椛島, 雅弘
Citation	大阪大学, 2017, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/61395
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

氏　名　（　椛島　雅弘　）	
論文題名	古代中国兵学思想史の研究

論文内容の要旨

本論文は、古代中国における兵学思想史を対象としたものである。具体的には、近年中国から出土している豊富な資料（新出土文献）を活用し、兵学思想が、儒家・道家・術数・占術思想といった多様な思想との交渉を経て、相互に影響を受け、発展するといった一連の事象に対して考察を加え、明らかにすることを主な目的とする。また、その前作業として、新出土文献の整理・解釈も行う。

本論文の構成は、序章に加え、第一部「銀雀山漢墓竹簡の研究」、第二部「兵家思想と儒家・占術思想」の計二部六章から成る。また巻末には、本論からやや内容が外れるが、「中国兵学」及び「新出土文献」に関連する資料・論考を附録として加える。

序章では、近年の古代中国兵学思想史研究を振り返り、自身の研究の位置付けを行った後、「兵学に関する新出土文献の整理・解釈」「兵家思想と諸子百家思想」「占術兵学の実態解明及び兵学思想史的アプローチ」という三つの点から研究を進めて行くことを明示する。

第一部「銀雀山漢墓竹簡の研究」では、銀雀山漢墓竹簡所収の兵学関連文献を取り上げ、分析を行う。

第一章では、『孫臏兵法』の文献的性格を再検討すると共に、古代中国思想史において「義兵」と「詭道」がどのような関係であったのか明らかにするため、『孫臏兵法』及び他文献における両概念についてそれぞれ確認する。また、『孫臏兵法』でなぜ「義兵」と「詭道」の両方が説かれているか検討する。

『孫臏兵法』は、当初上篇（十五篇）と下篇（十五篇）の三十篇であるとされていた。しかし、確定的な根拠に欠けることから、後に下篇が外され、新たに一篇を加え十六篇とされた、という経緯を持つ。よって、当初提出された『孫臏兵法』の特徴を、『孫臏兵法』十六篇として改めて検討し、特徴の多くが変わらず特徴として見られる一方で、現『孫臏兵法』十六篇のみに見られる特徴や、旧『孫臏兵法』下篇のみに見られる特徴が存在することを指摘する。また、その原因は、現『孫臏兵法』十六篇が、実践的な戦略・戦術に加えて、義兵といった軍事思想的な面も持つのに対して、旧『孫臏兵法』下篇は、専ら実践的な戦術のみを、箇条書きでわかりやすく解説することに主眼を置いた篇が大半を占めるという、文献的性質の相違によるものであることを述べる。

次に、古代中国思想史において「義兵」と「詭道」がどのような関係であったのか明らかにするため、『孫臏兵法』及び他文献における両概念についてそれぞれ確認し、『孫臏兵法』・『呉子』・『蓋廬』のように、両者が矛盾なく両存している場合と、『司馬法』・『荀子』のように、両者が同じ位層に存在し、二者択一的に対立する場合の二通りに大別できることを述べる。

最後に『孫臏兵法』において、なぜ「義兵」が説かれているのか、その背景について検討し、儒家との対立及び斉国の歴史が関係していることを論証する。加えて、『孫子』の軍事思想において重要な位置を占める「詭道」の思想が、『孫臏兵法』へ受け継がれていたことを確認し、このような経緯で、『孫臏兵法』は、「詭道」と「義兵」の両方を説くようになったと推測する。

第二章では、『孫子』・『呉子』をはじめとした『武経七書』や、『孫臏兵法』・『日月風雨雲気占』の関連記述、さらに『墨子』の守城論にまで視野を広げ、銀雀山漢墓竹簡「雄牝城」篇の兵学思想史上の意義を検討する。

まず、雄牝城篇の内容を分析した結果、全体的に攻城戦と地形を密接に関連付けた解説が大半を占めることを指摘する。そこで、『孫子』をはじめとする兵書において、同様の傾向が見られるかどうか、『孫子』九地篇や地形篇のように「地」を取り上げる記述は多く見られたが、それらはいずれも攻城戦ではなく、野戦を想定したものであることや、『六韜』に攻城戦と「地」を関連付けた記述が見られるが、雄牝城篇のように主題にはなっていないことを確認する。

また、同様の傾向が守城の術を説く『墨子』でも、他文献と同様、「城」と「地」を密接に関連づけて述べないこ

とを指摘する。
　以上の考察から、雄牝城篇は、現存する中国兵書中で唯一、攻城戦を地形と関連付けて具体的に論じており、雄牝城篇の思想史的意義はこの点に求められることを結論として述べる。
　第三章では、兵家文献である銀雀山漢墓竹簡「奇正」篇と、『孫子』・『孫臏兵法』の関係、及び道家思想の影響が見える『淮南子』兵略訓の関係性について検討する。
　まず、奇正篇と『孫臏兵法』は、共に『孫子』を継承しながらも、それぞれ独自に『孫子』の軍事思想を発展させた文献であることを論証する。また兵略訓は、奇正篇の思想を多く取り入れて成立した篇であり、奇正篇と兵略訓は、「奇正」「無形」「変化」の思想を共通して説くことに注目する。
　また一方で、兵略訓以外の『老子』・『荘子』・『列子』・『文子』・「黄帝四経」といった道家系文献にも、「奇正」「無形」「変化」が多く説かれていたことから、兵略訓が奇正篇の思想を取り入れたのは、これら三つの概念が、兵家思想と道家思想の両方にとって受容されており、その点で相性がよかったからこそ生じた現象であることを指摘する。
　また、奇正篇の思想史的意義は、『孫子』から『淮南子』兵略訓までの兵学思想における経過を知ることができるという意義だけにとどまらず、道家思想との関わりについて示唆を与えるという点で貴重な資料であり、後者を換言すれば、奇正篇と『淮南子』兵略訓の密接な関係は、「奇正」「無形」「変化」という観念を介した兵家思想と道家思想の接近という点で思想史的意義を持つ、と結論づける。

　第二部「兵家思想と儒家・占術思想」では、兵家思想と、儒家思想・占術思想との関係性について、それぞれ考察する。
　第一章では、『荀子』議兵篇等に見える兵家に対する態度を分析し、また、『荀子』以外の儒家系文献に視野を広げて、儒家思想と兵家思想の関係性を検討する。
　まず、『荀子』における兵家批判の要点は、「変詐」「権謀」―『孫子』風に言えば「詭道」だと分析する。次に、『荀子』以外の儒家系文献が「変詐」「権謀」といった詐術的「謀」についてどのような態度をとるのか、視野を広げて確認した所、『論語』・『孟子』といった文献では全く取り上げられない一方、漢代以降の儒学は、軍事的「権謀」に対しておおよそ二つ（細かく分けると三つ）の態度を取ったことを明らかにする。一つは『漢書』刑法志のように、『荀子』を受け継いで「権謀」「詐」を拒絶する立場、もう一つは、『法言』のように、時に条件を付けつつも、「権謀」「狙詐」といった「謀」について容認するか、もしくは『潛夫論』のように、特に制限することもなく「謀」を用いる立場である。
　そして、漢代以降に生じた「権謀」を容認するという現象は、諸子の学説が先鋭に対立していた先秦時代から、時代が下るにつれて、その先鋭さが失われ、儒家から兵家思想への「歩み寄り」が生じたことに因るものであると予想し、詐術的「謀」の思想が、儒家思想と兵家思想を繋ぐ接合点であることを明らかにする。
　第二章では、「合理と占術」という観点から、陰陽五行思想を含めた占術思想と兵学思想の関係性について分析を行う。そのために、まず自身の「合理兵学」と「占術兵学」の分類・定義について明示する。
　その上で、『孫子』十三篇・『尉繚子』や、『蓋廬』・『孫子』佚篇・『孫臏兵法』、『漢書』芸文志等、できる限り多くの文献を参照して、当時の兵学思想において、「合理」と「占術」がどれほど区別されていたのか、その認識について検討し、古代中国兵学思想において、「合理」と「占術」の境界線は、我々が考える以上に曖昧であったことを指摘する。
　第三章では、占術兵学が、如何なるものであったのか、その多様性や、占術兵学の理論・発展について、八風占をモデルとして検討する。
　まず、『尉繚子』・『淮南子』の記述を基に、占術兵学にどのような種類が存在するのか一つ一つ確認する。その後、占術兵学を伝える銀雀山漢墓竹簡『天地八風五行客主五音之居』（以下、『天地』と略記）の八風占を主に取り上げ、構造分析を行い、現在、整理小組によって『天地』とされている竹簡の内容は、しばしば矛盾が存在することを明らかにする。そしてこの原因について、銀雀山漢墓竹簡内には、『天地』以外にも複数占術兵学を述べる文献が存在していたか、『天地』自体が、雑多に占術兵法を集めて編纂した文献であったか、いずれかに起因することを指摘する。
　また、八風と占断の間にどのような理論が介在するのか、軍事用語として常用される「客主」や、陰陽・八卦といった要素に注目し、また『五行大義』・『乙巳占』・『観象玩占』や『国語』・『称』の記述を基に考察する。そして、元々八風占は、天道思想を背景に持つ素朴な客主観に基づいた占術であったが、後世八卦が八風に対応するようになり、八風の名称や占断にも八卦の性質が影響を及ぼし、そして発展したと分析する。

様式 7

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　（　椛　島　雅　弘　）			
論文審査担当者	（職）		氏　名
	主 査	大阪大学　教授	湯浅邦弘
	副 査	大阪大学　教授	荒川正晴
	副 査	大阪大学　教授	川合　康

論文審査の結果の要旨

以下、本文別紙

様式７別紙

論文内容の要旨及び論文審査の結果の要旨

論文題目：　古代中国兵学思想史の研究

学位申請者　　椛　島　雅　弘

論文審査担当者

主査　大阪大学教授　　湯　浅　邦　弘

副査　大阪大学教授　　荒　川　正　晴

副査　大阪大学教授　　川　合　　康

【論文内容の要旨】

本論文は、中国古代の兵学思想史について新資料を積極的に活用しながら考察を加えるものである。従来の中国思想史研究では、「儒家」「墨家」「法家」などの枠組みが重視され、兵書や兵学が真正面から取り上げられることはほとんどなかった。本論文は、中国古代の兵学を主題とし、また、『孫臏兵法』の発見で注目されている銀雀山漢墓竹簡を活用して、その思想的特色と展開を考察しようとする意欲的な内容であり、全体は、第一部「銀雀山漢墓竹簡の研究」、第二部「兵家思想と儒家思想・占術思想」、の全二部計六章からなる。冒頭に序章「研究史と課題」、巻末に、「資料篇」「論考篇」の計六つの附録を加える。分量は、400 字詰め原稿用紙換算で本論 280 枚、附録 190 枚である。

まず序章で、先行研究を取り上げ、「『孫子』研究」「通史研究」「兵学思想と諸子百家思想・兵学思想と新出土文献」という三つの観点から整理して課題を提示し、その課題を克服するために、本論が「兵学思想と諸子百家思想」「兵学思想と新出土文献」という二方面から検討を進めることを宣言する。

第一部では、銀雀山漢墓竹簡所収の兵学関連文献を取り上げる。第一章「『孫臏兵法』再考―「義兵」と「詭道」」では、資料的問題が再考されつつある銀雀山漢墓竹簡『孫臏兵法』について検討し、そこで特に問題とされている「義兵」と「詭道」の関係が思想史上においてどのような意味を持つのか、他の伝世文献にも視野を広げて分析する。この両概念は、一見対立しているようであるが、『孫臏兵法』では、『孫子』以来の兵学の伝統を継承する一方、戦国時代の斉の国情などを反映して、この二つが併存していたことを明らかにする。続いて、第二章「「雄牝城」篇と中国古代の攻城・守城の思想」では、銀雀山漢墓竹簡「雄牝城」篇を取り上げ、そこに見える攻城戦に対する思想がどのような意味を持つのか考察する。『孫子』には見られなかった攻城に対する多様な思索が見られ、また「地」との関係が特に留意されていることを明らかにする。そして、第三章「「奇正」篇の思想史的意義―兵家思想と道家思想」では、「奇正」のキーワードを基に兵家思想と道家思想との接点を探り、これが漢代以降の道家系文献にも見られることを指摘する。

次に、第二部では、兵学思想と他の諸思想との関係について考察するが、まず第一章「『荀子』議兵篇と儒家思想・占術思想」で、当時の兵学の状況を俯瞰する『荀子』議兵篇を取り上げ、そこで批判されている「謀」を手がかりに、兵学における「謀」と儒家系文献における戦争観との相違を指摘する。続く第二章「古代中国兵学

における「合理」と「占術」の思想―その認識をめぐって」では、兵学思想史研究の重要課題の一つである「合理」と「占術」の問題を取り上げ、後者については独自に「占術兵学」という定義を行った上で、伝世文献や新出土文献（張家山漢簡、銀雀山漢墓竹簡）を広く検討し、古代中国においては、この「合理」と「占術」とが必ずしも峻別されていなかったという状況を説明する。そして第三章「『天地八風五行客主五音之居』八風占について―客主観を中心として」では、具体的な占術兵学を説く文献として注目される銀雀山漢墓竹簡『天地八風五行客主五音之居』を取り上げ、そこに見える「八風占」の構造・占法を詳細に分析する。また、その占断の理論や、重要な軍事用語「客主」の語にも注目し、八風占の発展過程を推測する。

【論文審査の結果の要旨】

本論文は、申請者がかつて卒業論文で取り上げた銀雀山漢墓竹簡『孫臏兵法』を含め、新出土文献を積極的に活用して研究を進めたもので、学術誌等に既発表の論文四本を基に、さらに、書き下ろしの二つの章と附録などを加えて再編したものである。

新出土文献の研究は、郭店楚簡・上博楚簡・清華簡・北京大学竹簡などの公開で世界的に注目される分野となっているが、1972 年に発見された銀雀山漢墓竹簡も、2010 年の『銀雀山漢墓竹簡［貳］』の公開によって、また新たな局面を迎えている。銀雀山漢墓竹簡は、その多くが兵学文献であることから、これらを取り込んだ新たな兵学思想史の構築が待たれていた。本論は、そうした要請にも答えられるよう、精力的な分析を行っている。

銀雀山漢墓竹簡に的を絞った第一部では、『孫臏兵法』、「雄牝城」篇、「奇正」篇を取り上げているが、そこで、兵学の重要語である「義兵」「詭道」「奇正」や、『孫子』以来の軍事上の課題となっている攻城戦と「地」の関係に着目し、独自の考察を進めたのは、高く評価される。また、「奇正」に関する思考を、兵家思想と道家思想との接点とするのも、後の漢代における兵学思想の展開を考える際、重要な指摘となろう。

この第一部以上に、他の諸学派との関係に注目するのが第二部である。従来の兵学思想研究は、とかく『孫子』『呉子』『尉繚子』など「武経七書」系の兵書のみに注目しがちであったが、本論文では、儒家・道家・墨家など、できるだけ周辺の諸思想との比較を行い、兵学思想の形成と発展がこれら諸思想との複雑な交渉の上に行われたことを指摘している。また、研究上の懸案である兵学の「合理」と「占術」という問題についても、新出土文献である張家山漢簡『蓋廬』の分析も踏まえて、独自の考察を行った点は高く評価される。

さらに、附録ではあるが、ここでも銀雀山漢墓竹簡「呉問」篇や「四時令」篇の基礎的な考察が行われており、将来、本論の考察に組み込まれていく可能性を感じさせる。同じく附録とされた中井履軒の『述龍篇』の翻刻と、そこに見られる「八陣」の分析も、日本の江戸時代の儒者が兵学に対してどのような見識を持っていたか、という研究に発展していく可能性を秘めている。総じて、多くの可能性を含む論考であると評価できる。

ただ、本論文では、「兵学思想史」を標題としながらも、各部各章の論考はやや個別的になっていて、『孫子』以前の兵学思想の状況（例えば、上博楚簡『曹沫之陳』）から秦漢代までを「史」として明快に論述しているとは言いがたい。また、兵学思想と表裏一体の関係にあったと思われる時代背景（戦争形態や城邑など）の変化について説明不足の感を否めない。さらに、「合理」と「占術」の問題についても、その推測の妥当性を検証するためには、漢代以降の兵書に視野を拡大する必要があろう。

とは言え、本論文は、新出土文献を積極的に取り上げ、各文献を丹念に精読した上で構想された重要な研究成果である。特に、まだほとんどまとまった研究のない『銀雀山漢墓竹簡［貳］』所収文献をいち早く取り上げて検討した点は高く評価でき、今後の研究のさらなる進展が期待される。よって、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。